

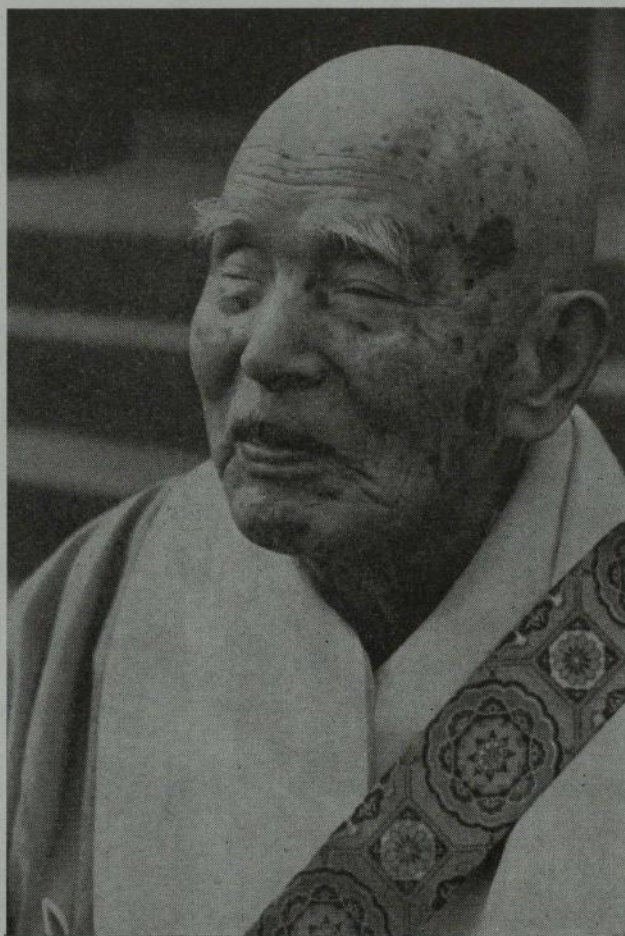
NO. 162

全 友

11/45

善導は往還一如を教えた。

誰か死んだら、それは還相を見る時だ。



何時か解らぬ私の死ぬ時が還相故、
それを見とどけて下さい。

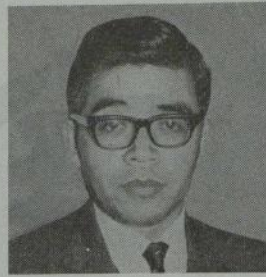
(浄土宗大本山増上寺法主権尾弁匡台下)

昭和45年11月1日

現代僧侶を叱る

金岡秀友

(東洋大教授・文博)



現代の僧侶に対して
社会は何を要望してい
るであろうか。

あるいは何も要望し
ないであろうか。今秋
新潟県の長岡市で開か
れた全日本仏教会の大会において、長岡市の青年仏教
会がまとめた成果にしたがうと、社会は仏教になお多
くものを期待しつつ、僧侶に対しては失望の声を挙
げている向きが多い。逆にいえば、僧侶に対しては失
望しつつも、仏教にはまだ望みをかけている、という
ことになる。この場合、長岡の土地柄を考慮に入れれ
ば、この声は決して批判のための批判ではなく、まし
てや、為にする悪意に由るものではさらになんといえ
よう。「仏教ほどありがたいものはない。しかし坊主
ほどいやなものはない」という若波茂雄のことはよ
り、ずっと仏教的雰囲気の中にあつての発言なのであ
る。

およそ、自分をひとつのことに置いて、純粹に
客観的にことを批判することほど容易で、愉快なこと
はない。一億総批評家といわれるように、今日の日本

はまさにこの風潮の花盛りである。自分は、常に渦中
にないのであるから、何をいっても責任はないし、具
体案を示さないでも何か目新しく、「いいことをいっ
ている」という印象を見る人、聞く人に与えればいい
のだから、彼らは颯って新奇な、斬新なことはを口に
したがるようになり、建設的だが地味な意見などとい
うものは、発表する手段さえ与えられなくなるのがお
ちである。高名な批評家が後から後から新造語を考え
出すのは、彼の批評家としての技倆よりも保身の知恵
と見る方が当ていよう。

このことは仏教論・僧侶論に対しても決して例外で
はない。例外ではないどころかもっとも激しいといっ
た方がいいかもしれない。僧侶に対する批判や悪口ほ
ど、安全で面白いものはほかにちよつと例がない。そ
の点では代議士の悪口を落語家や漫才までが得々と取
り上げるのとよく似ている。「代議士は大畜生か」と
いう論文がかって『文芸春秋』誌上に発表されていた
ことがあったが、「僧侶は大畜生」かという論文を書き
たくなるほど、世間は僧侶への悪口を楽しんでる傾
向がある。これは無視や笑殺ですこせることではない。

この風潮は二つのことをわれわれに教えている。

一

一つは建設的な動機からくるものであつて、激しい
ことばの中に、現代の僧侶への覚醒をうながすことは
の汲みとれるものである。

第二は、もう僧侶には絶望し、それを戯画化し嘲笑
する以外に情熱を持たなくなった人たちである。彼ら
の批評は冷めていて愛情はないが、それだけに核心を
ついた批評を聞くこともできる。

この二つの角度を考慮に入れて、現代の僧侶に対す
る社会の要望を汲みとって行こうと思う。

まず、第一に、好意的乃至建設的批評の中から、何
かの要望を汲みとることはできないだろうか。

その一つに、寺あるいは僧侶が、激動するこの社会
にあつて、浮遊して止まるところのない現代人に憩い
と安らぎを与えて貰いたいという要望である。この要
望は、進んで宗教的覚醒や哲学的な世界観を育んで貰
いたいというような高度の要求までに昇化される場合
もあるが、そこまで行かずとも、疲れた心身が、寺域
にはいり、あるいは僧や寺院に接することによって、
ホッとするという、いわば感性的な面での安らぎの要
望までも含んでいる。

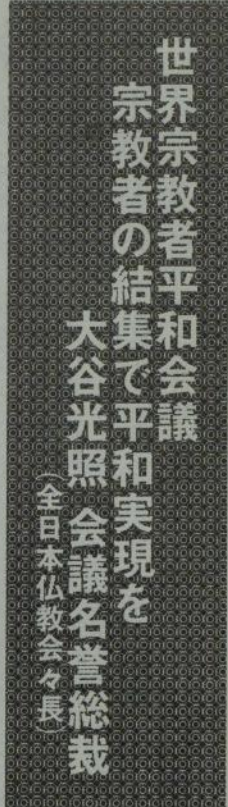
寺が「寂静処」であり、僧が「和合僧」であるとい
う、仏教出立以来の精神が、今ここでまた改めて社会
から要求されているのは誠に興味ぶかく、また当然の
ような気がしてくる。

この意味から照らすと、今日の多くの寺や僧侶の在
り方にも、在るべき姿にとつての判断が生れてくる。

たとえば、機能主義的な寺の運営、さまざまな副次的
企業の主業化など、その必要性はわからないではない
が、寺や僧に対する、この第一義的要求を考慮しない
で遂行されるときには、そこにはただ、宗教の世俗へ
の巧妙な追従が見られるだけのこととなる。いわゆる
「やり手のお坊さん」「世間師の僧侶」は、社会は決
して第一には要求してはいないのである。

昭和45年11月1日

世界宗教者平和会議 宗教者の結集で平和実現を 大谷光昭会議名誉総裁 (全日本仏教会々長)



このたび、本日より二十一日まで六日間にわたって、日本の古い都である京都の地におきまして、国立京都国際会館を会場として、日本宗教連盟の主催にかか

る「世界宗教者平和会議」が開催されるに際し、世界の各宗教団体を代表される方々が、多数御参加下さいましたこと

は、世界の平和と人類の幸福のために、まことに慶賀にたえないところであり、何よりも先づ、はるばる外国から御出席下さいました方々を初めとして、御参加の皆さまの御熱意に対し、深い感銘と敬意を表し、衷心より厚く感謝いたします

この会議が日本で開かれることに對して、私は二つのことを指摘したいと思ひます。その一つは、日本が世界で原子爆弾の被害をうけた唯一の国であるという

事実であり、他の一つは、一九四七年以來、わが国は攻撃的戦力を否定した所謂「平和憲法」を持つてゐることであります。この二つのことからみましても、日本は、この意義深い会議を開くにふさわしい所であると確信いたします。

さらに私は、京都に住んでゐる者として、京都がこの会議の場所として選ばれたことを心から喜んでおります。アーノルド・トインビー氏が特にこの会議に寄せられた言葉の中で、「京都は世界宗教者平和会議の集会場として、まことにさいさきのよい選択である。京都は千年余にわたつて日本の都であつたし、世界で最も美しい町のひとつである。」といつておられますが、私も全く同感であります。

御参集の皆さまが、お互いにそれぞれの宗教の本質を理解し合ひ、その相互理解の上に立つて、世界平和の原理を求め、人類の調和ある進歩のために、宗教者として果すべき役割を明確にし、世界の宗教者がいかに協力し、いかに実践するかを、御検討いただきたいという念願のもとに、この「世界宗教者平和会議」が開催されることになったのであります。

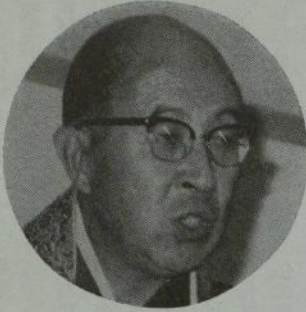
今や、人類の運命は一つであります。核兵器は、これまでに人間が積み上げてきた物質文明や精神的文化遺産の一切の崩壊をもたらすばかりでなく、人類の存在そのものにまで、その脅威をおよぼさうとしております。今こそすべての困難を乗り越えて、この地上から戦争をなくし、平和な世界を築くために、懸命の努力を払わなければならないときであります。

宇宙時代に象徴される科学の発達と、技術の進歩は、実にすばらしいものがあります。そのすばらしい科学文明は、恐るべき威力をもつた軍備の競争を生み、武力を伴う国際紛争があつておられません。しかも科学技術の進歩は却つて人間を疎外し、科学文化は人間性喪失の文化とさえいわれ、人類の危機、精神文明の危機が深く憂慮される現状であります。

科学の一層の発達によって、たとえ極大の世界から極小の世界まで、人間があらゆることを知りつくしたとしても、「人間は如何に生きてゆけばよいか」「平和と幸福は、どうしたら実現出来るか」という問いに對しては、科学の立場からは、答えることは不可能であります。科学は平和へも貢献しうると共に、破壊にも寄与しうるものとして発達してきました。この科学文明を、人類の平和に貢献させるものは、人間の心であります。人間自身が、先づ個人の心の中に平和を築き上げることが先決問題でありましよう。アーノルド・トインビー氏のこの会議

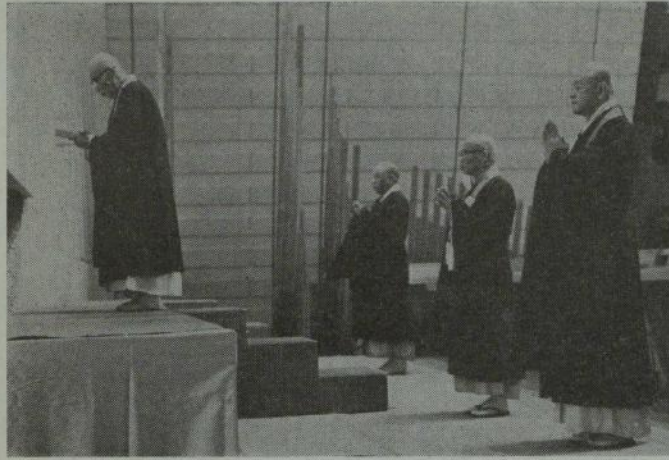
についての論説の中で「人類はその成員の一人一人が、他の一人一人と平和に暮らしているのではなくては平和とはいえない。平和の源泉、乃至は戦争の源泉は、人間一人一人の内面生活なのである。人類の運命は、われわれの内面での、自己中心性克服の闘争にかかつてゐる。経験から誰しも知つてゐるやうに、この闘争は一生継続し性質のものである」と指摘されておられます通り、自分自身の心の中に、自己中心の考えから他人に對する怒りと憎しみと嫉みのあることを反省して、すべての人が、ともどもに平和と幸福に生きることが出来るよう、一生涯を通じて努力することが、何よりも大切であります。他人の立場を理解し、他人を許す寛容の心、それは正に世界に平和を実現する精神的根底であります。それは、人間にとつて実にむづかしいことであり、また平和の実現に對して、あるいは遠まわりの道であるかも知れませんが、いかにむづかしくとも、また遠まわりであろうとも、真の平和、万人の納得する平和は、かかる精神的根底の上のみ築き上げられるものと確信いたします

私たちは、おのおのの信仰に裏づけられ交えられて平和を実現するという立場から、聡明な反省と、たゆまざる努力とによって、一歩一歩と平和の目標に向つて進むべきでありましよう。如何に科学が発達し、技術が進歩しましても、科学それ自身が平和を決意するということはありません。人間自ら、人間の生きる道、世界に平和をもたらす道を発見しなければなりません。このような意味にお



大谷会長(講演)

昭和 4 5 年 11 月 1 日



“平和への発願”

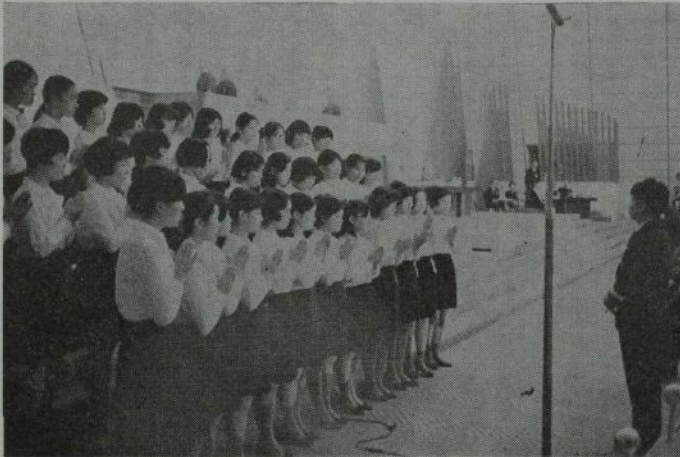
開会式における仏教の祈念

(各宗管長台下の親修)

いて、平和の実現は、一人人間自身の決意と努力にかかっていると申さねばなりません。この会議では、平和実現のために最も必要と考えられますものの中から、「非武装」、「開発」、「人権」という三つの具体的問題を取り上げて、研究討議の課題としております。討議の過程において意見の相違も起りましようが、単なる抽象論、観念論に終ることなく、具

体的に平和実現の方策を論ずることが肝要であります。なんとしても世界の平和を実現するため前進しなければならぬのでありますから、個人的な感情や信仰を乗り越えて、世界の平和のため奉仕するということ固く手を握りあつて、この会議を進められるよう期待いたします。この会議の真の意義と成果は、むしろ、会議のあとで、世界の宗教者が平和

実現のためどのような行動をとるにかかっているといえましょう。それ故に、この会議の結果、世界の各宗教を結ぶ何等かのきずなができ、そのきずなを通して団結をますます固くし、世界平和に大きく貢献できるよう切望してやみません。



“讃仏歌”

(京都華頂女子短大コーラス部)



“平和を求め世界の良心が集う”

第一回の平和会議は全世界の十大宗教代表ら三百五十人が参加して六日間に亘り、人類の恒久平和をもとめて話合った。

(京都国際会議場における総会)

軍備なき世界の創造 ①

(世界宗教者平和会議講演より)

湯川 秀 樹博士

(ノーベル賞受賞者)

世界平和の達成は、どの宗教にも共通する問題であると思います。世界宗教といふ宗教は、個人を救済すると同時に、人類全体を救済することを念願としているに違いないからであります。とくに現代のように、地球上の諸地域の間に関係が密接になってきた時代において、それが当然のことと考えられます。

そこで人類全体の救済について考えてみますと、そのための努力が意味あるものとなるのは、核戦争のような最悪の事態が起らないという条件下においてであります。私は、十五年ほど前から、世界平和のためには、戦争を廃絶してしまわなければならない、という大前提の上に立つ、科学者の平和運動に参加してきました。この大前提は、今日では大多数の人々にとって、ほとんど自明のことでありましょう。それは宗教者にも、また私のような科学者にも共通する願望に違ひありません。

ところで核兵器出現以前においては、戦争を一般的に否定するという考え方は、実は絶対少数意見でありました。反戦主義、あるいはさらに徹底した非暴力主義、無抵抗主義は、大多数の人々に全く非現

実的な考え方と見なされてきました。戦争は好ましくないが、ある場合には止むをえないという消極的肯定論から、正義の戦いには当然参加し協力すべきだといふ積極的肯定論にいたるまで、いろいろニュアンスの違いはあっても、「場合によっては、戦争を是認しなければならぬ」というのが多数意見であったことは確かです。しかし、核兵器が出現し、その威力が増大するに伴って、人類の全体的破滅という表現が決して誇張でなく、それが現実起こる可能性を、どうしても無視できなくなりました。米ソの二大国の保有する核兵器の爆発力の総体は、人類を何十回も全滅しうるほどの量になつてゐるということが、すでに何年も前からいわれております。そういう状況の中では、核戦争を肯定する理由は、もはやありえないものであります。したがつて、今日および今後の問題は、核戦争だけでなく戦争一般が否定されるべきかどうかにあるわけです。ところが核兵器以外の兵器の威力もまた急速に増大しつつあります。化学兵器、生物兵器といわれるものは、核兵器ほどに決定的なものではありませんが、その大量殺傷性、残虐性は、ますます増大しつつあると推定されます。したがつて核兵器の使われない小規模な戦争、局地的な戦争といえども、その災害は、今後ますます恐るべきものとなるのであります。さらにまた通常の戦争がエスカレートして核戦争に転化する可能性は常に存在しています。私

は、これらの現由だけで、戦争を全面的に否定するのに十分だと思ひます。しかしながら、これだけの理由では納得しない人がまだまだたくさんあるように思われます。現にこの地球上では戦争が行なわれてゐます。戦争の当事国の双方、およびそのどちらかを支援する国々はそれぞれ戦争行為を正当化する理由を持ってゐます。その中で最も根本的と思われるものが三つあります。その一つは、ある国あるいは国家群の信奉する価値係が、相手国あるいは国家群のそれよりすぐれているという理由であります。二番目は、ある国あるいは民族の存続が、それを危くしようとする相手国の武力攻撃を防ぐことによつてしか保証できないという判断であります。過去に行なわれた多くの戦争について見ますと、第一の理由すなわち価値体系の優位という理由づけの客観的評価は、一般的に困難であるのに対して、第二の理由、すなわち侵略に対する正当防衛という理由づけは、今日から見ても正しかったと客観的に判断できる場合が、いくつもありま

とするためには、少なくとも新たに独立しようとする国一そして、そうする正当な理由を持つ国一の目的が、戦争以外の方法によつて達成されるための、国際的規模での大きな努力を伴わなければならないことになりま

しかし何といつても、人類全体にとつて一番重要なことは、核戦争が起らないようにすることでありま

う考え方から出発せざるを得なかつたのであります。ここで私は日本人の一人として、皆様に次の点に関心をもちたいだきたいと思ひます。一九四六年に成立した新しい日本国憲法の第九条には、戦争の放棄が宣言されてゐるのであります。国際紛争は戦争に訴へることなく、平和的な方法で解決しようという主張を、自らが一方的に交戦権を捨てることによつて裏づけたのであります。そして今日にいたるまで、この憲法を守り、今後も守り続けようとしてゐるのであります。さて、世界の平和に関する考察の出発点を「戦争否定」の思想にとつた場合これを有効で現実性のあるものにするために、最少限度必要なのは「平和共存」といふ考え方を定着させることだと思ひます。さきほど、ある国家あるいは国家群の信奉する価値体系と、他の国家あるいは国家群の信奉する価値体系とが相容れない場合、それが戦争の原因あるいは正当づけの理由となると申しました。

(以下次号へ)

第10回 世界仏教徒会議の会期決定

WFB 常任理事会

(一部既報) 本年度の世界仏教徒連盟の常任理事会は予定通り十月三日、セイロン、コロンボ市のセイロン仏教会本部で開催された。

会議は世界仏教徒連盟会長のタイ国フーン妃殿下が議長となり、マララセケラ氏(セイロン)、宮原スナラ氏(アメリカ)、ウイリアム氏(セイロン)、テンチャー氏(マレーシア)、サンガバシ氏(タイ)と石井真峰全仏国際委員(稲田理事長代)の各氏が出席して開催された。

議案審議については、まず前年度の常任理事会の報告事項について確認があり、次の議案がそれぞれ審議された。

△ ユネスコ加盟について

一九七〇年十月十二日パリで開かれるユネスコ総会にWFBからオブザーバーを一人派遣されたいとパリの事務総長より通告あり、この時よりユネスコ加盟が効力を発するものと思われる。△ WFBユネスコ委員会候補者について。

- 1 イナダ (ハワイ)
- 2 キンケオ・アタガラ (タイ)
- 3 R・L・ソニ (ビルマ)
- 4 ビッチン・フイ(シンガポール)
- 5 ケオロングト (ラオス)
- 6 チヤンド・バラサル (インド)

- 7 ミン・チャオ (ベトナム)
- 8 石井 真峰 (日本)
- 9 リーショー・モン (マレーシア)
- 10 L・G・ヘワゲ (セイロン)
- 11 W・F・B会長
- 12 W・F・B事務総長
- 13 W・F・B常任理事
- 14 " "

以上が決定された。

△ ルンビニ開発について
ウ・タント国連事務総長が非帯なる努力をしているので確実であるが、WFBへの負担割当は明確にされていない

△ WFB支部加盟申請について
一九七〇年四月香港において九階建総合病院を設立し、国際仏教セミナーを主催した香港仏教会をWFB香港センターとして承認。

△ 第十回WFBセイロン会議について
一九七一年五月九日から四日間セイロン国コロンボ市において開催することに決定。

- 五月八日 各代表団必着
 - 五月九日 ウエサカ祭参加
 - 五月十日 開会式並びに総会
 - 五月十一日 会議
 - 五月十二日 会議並びに閉会式
- 各国代表はデリゲート二名、オブザー

バー三名とする。

△ WFB事務次長任用について。
高野山金剛峯寺信徒であり、タイ国日本人仏教奉賛会理事長である小谷亀太郎氏を委嘱する。

これらの事項が話合されたが、全仏代表の石井委員の報告会が去る十三日におこなわれ、詳細な報告があった。

全仏制度調査会

第一回委員会を開催

第一回制度調査会は去る十月十二日午後二時から築地本願寺で開催された。

事務総長からあいさつがあり協議に入り、正副委員長が選出されたが、実質的に検討することは十一月に開かれる第二回以後にすることとし、事務局からの現況報告をきき現行審附行為等の研究事項が話合れた。

なお委員長に、伊藤勝淳師、副委員長に郡司博道師、別所弘因師が互選された

田村晃成師、ベトナムへ

全仏嘱託を依頼

ベトナムの万行大学客員教授として赴任する田村晃祐氏を、同国滞在中海外連絡員に委嘱されたが同氏は十月二十九日日航機で羽田を発った。

なお滞在は二年間となっているが氏はさきにセイロン政府の英文仏教百科大辞典編纂所員として二年半、キャンデー市に駐在したことがある。

全仏事務総局移転

財団法人全日本仏教会の事務総局は昭和二十年九月二十九日に港区芝公園の女子会館より中央区築地の本願寺に移転して以来、昭和三十二年八月二十三日、財団法人となり、今日に至る二十五年間のながきに亘り築地本願寺に事務総局を設置してきたが、築地本願寺の教化面の多様化により、同寺の教化活動に支障をおよぼすと共に、全仏自体の発展充実が内外より強く希求される現状とを併考し、このたび浅草の東京本願寺の好意により、同寺の旧幼稚園講堂を借用することになった。

新事務所は鉄筋コンクリート造りの二階約四十坪で、事務室、応接室、小会議室も完備することになり、全一仏教運動の拠点として、今後の進展を事務総局一同は期している。

なお設立当初より二十五年間の築地本願寺御当局的全仏運動に対する御好意に深甚なる謝意を表すると共に今後にも不変の御支援を切願するものである。

新事務総局は

東京都台東区西浅草一ノ五ノ五(東京本願寺内) 電話〇三(八四三) 六三四一—三(交通機関) 国鉄上野下車、地下鉄銀座線田原町駅、都電田原町

世界仏教指導者会議

盛会裡に閉会

さる十月十日より六日間にわたり、大韓民国首都ソウル特別市ウォルカ、ヒルを中心に開かれた世界仏教指導者会議は十日午前十時より市民会館において海外代表、国内各仏教代表四千名参集のもとに盛大な開会式が開かれわが国から愛知外務大臣の祝辞を衆議院議員進藤一馬氏によってなされた。

同日午後一時より十二日夕刻まで本会議が韓国館国際会議所において続行され、仏教の大同団結について討議し、世界仏教連合を設立しようということであったが各国代表より世界仏教徒連盟を強化していくべきであるという意見が多か



昭和四十五年十月一日発行
十月号 第一六一二号

ったが結局採択するところとなった。

日本仏教代表は、常務理事会で決定しており国際仏教親善の立場より出席することとしていたため、このことについては態度を保留し大会の了承を得た。

ついで大邱、慶州、蔚山、釜山等を巡回し仏教による日韓親善のために大きな役割を果し十六日夜無事帰国した。

文化専門委員会

十月二十九日に開催

全仏文化専門委員会（眞溪義貫委員長）が十月二十九日午後二時より事務総局で開催された。

白幡文化局長の本年度前期の文化局関係の報告・挨拶により開会され、眞溪委員長が座長になり審議に入った。

仏教界の動き

(ニュース・投稿を歓迎します)

一、全一仏教聖典の再刊について、二、中央講習会開催についての両議案について各委員より積極的な意見がのべられた。第一については体裁、活字等を是正して再刊が決定。第二は会場の選定に慎重をきし講師は有名人にとられず、実際に寺院活動に対し新展開をもつ講師が要求された。なお講習会場は東京都内とし、期日は明年二月中旬下旬が予定されている。

過去における講習会の東京開催は参加者が少数であった為、今回は参加者あつめにも当局は苦心しなければならない。

第十回世界仏教徒会議セイロン大会

日本代表団募集

このたび第十回世界仏教徒会議がセイロンの首都コロンボ市において昭和四十六年五月九日から四日間開催されることになりました。

全日本仏教会においては第一回の会議以来毎回多数の代表団を送ってまいりました。

今回のセイロン会議にも代表団を送り、あわせて東南アジア

ならびに西南アジア諸国を訪れて各国の寺院参拝や仏教徒と友好親善を深める機会を得たく別項の日程によって代表団を派遣することにいたしました。

なにとぞご参加下さるようお願いいたします。

なお、定員に限りがありますので満員になり次第締切らさせていただきますからご了承下さい。

記

一、経路

東京→サイゴン→クアランポール→コロンボ→キャンデイ

申込先 東京都台東区西浅草一ノ五ノ五 (東京本願寺内)

一、ボンプベイ・カトマンズ・ポカラ・ラングーン

二、期間

昭和四十六年五月六日～五月二十一日 (十五泊十六日間)

三、参加費用

三六五、〇〇〇円 (ただし、旅券代、注射代、査証代は含まれていません)

四、申込方法

申込用紙にご記入の上、申込金五万円を添えて全日本仏教会国際局宛にお申込み下さい。残金は昭和四十六年四月六日までに左記取扱銀行にお振込み願います。

東海銀行浅草支店
全日本仏教会口座

五、募集人員

四十名

六、申込締切

昭和四十六年三月一日 (満員になり次第締切らせて頂きます)

全日本仏教会

電話 (八四三) 六三三三

発行人 伊藤 哲雄 編集人 白幡 憲佑

発行所 財団法人 全日本仏教会
東京都台東区西浅草一ノ五ノ五 (東京本願寺内)